



学びの共同体3つの柱

第1 こどもたちの考えを中心に、こどもたちの分からなさを取り上げてそれと寄り添いながら学びを作っていく。

- こどもたちの意欲・集中力が授業を見て感じられるかどうか。(授業は成り立っているけれど表情を見るとお付き合いしているだけ、眠たそうにしているとか、話し合いといってもなかなか話が出来ないではダメ)
- こどもが自ら物事を探求していこうわかっていこうという意欲をもつ授業を作りたい
- 自分が知りたいこと自分が今日の問題の中でわからないことを分かるようにしていきたいということになったときに教師も子どもたちの分からなさに付き合うという気持ちがないと作っていけない。
- 教科書に書いてあることを優先しようとする、こどもたちの分からなさは見落としてしまうので、よくこどもの声を聞かなきゃいけない。

第2 教室にいる全ての子どもたちの学びを作ってあげる。保障していくということ。

- 教師一人で教室の中の子どもたち全部を見ていくことは大変なこと。どうしても見落としが出来てくる。そこを何とかするのが小グループ。4人グループを入れることでこどもの中で問題を解決させていく。先生が全部関わらなくてもこども同士が関わって解決していく。その段階が基礎課題になってくる。この部分をこどもたちに任せていくというスタイルになっている。グループを入れるということでこどもの手を借りて全てのこどもたちを授業参加させていく。

第3 一人ひとりの先生の授業づくりをしながら学校作り・学校改革につなげていく。最終的には民主主義を行える人間を育てていくことでこどもたちの将来を保障しなければいけない。

- 教師が学び合っていないのに、こどもだけ学び合え、というのはこどもに伝わらないこと。
- 今日のようにこどもたちの話をしながらどういう授業をすればいいのか教師が学び合う。栗津中は独自に、実践交流で、日頃やっている中のヒット授業というのを取り上げて、みんなが平等に報告し合おう、という場を作っている。教師の研修が日常的に行われている。これが一人の先生の授業づくりでなく、学校全体で授業づくりを行う、学校作りを行うということになる。

栗津中の授業・協議会・課題について

授業スタイル

○課題1・課題2を基礎の課題・ジャンプの課題と位置づけている、これがはっきりしてきた。授業の前半・後半というイメージが出来てきた。どの教科でもはっきりしてきた。



生徒の方も課題1をやって課題2をやる、そういうパターンに慣れてくると教師が意識しなくても生徒の方が次これいっとう、と次は難しいぞ、ということを感じながらもとみんなが知恵を出さないと、という授業スタイルが身に付いてくる。学びがだんだん自分で出来てくる。

○身近な例から授業の導入を工夫していたのは良かった。

○どの子が課題を持っているんだろうかと区別が付かないくらいみんな良くなってきている。格差がほとんどない。内部的にはあるんでしょうけれど表情には出てきていない。みんな顔が上がっている。

○1年生の中に、コノ字が定着している。

生徒の変化

○この学校の生徒の様子はこの4・5年で変わったと私は見えています。

○昨年11月に2年生の授業を見たときにずいぶん子どもたちの表情が変わりましたね、ということを経験先生にお話ししました。顔がみんな上がっている、明るく。たまたまその学年だけなのかなということですが、1年生の様子を見てこれは手応えのある生徒たちの様子だなと感じます。

○毎日の授業の中で聞くということが体の中に染み込んできているので、教室から出てきたときもそれが現れてきたと捉えると、学び合いの姿勢が学年が集まっても、全校が集まっても出来てきているというように思います。

○子どもたちが聞くということは、教師が子どもたちの話を聞くということを出来ないで実現していかない。ということは先生方が授業の中で生徒が言うことを受け止めている。そういう体が出来てきている。だから、人の話を聞くということが日常的に行われているという一つの成果だということです。

協議会

○先生方の協議会の在り方というのがとても良くなっているのを前から感じています。子どもたちの学ぶ姿、子どもの名前、○○くんと△△さんがどういう関係であったかということをつぶさに見ながらそれで語られる。教師の授業のやり方よりも子どもたちのやり方を見ている。そういう見方をすることで子ども一人ひとりを大事にしていくことにつながるんですが、それがこういう協議会の中で報告されるというのは意味がある。

○子どもたちの中でまだ分からなさを前面に出していない。これが次の課題。学び方の質を変えていくということを2年生の課題にしていかなければいけない。

○意外と生徒というのは先生の話の聞いているようで聞いていないし、教師の話は大人の感覚で分かりきったことだと考えて話すので子どもにとってはなかなか分かりづらいこともある。子どもの方がうまく説明するということもあるので、子どもに出来るだけ出番を作っていくのが良い。

繋ぐ

○繋ぐということをやらせなければいけないんですけど、なかなかそれは難しいんですよね。例えば、教師もこの協議会というのは授業みたいなもの。今日の報告の中で、鷺先生の見たグループの後に平松先生が同じグループの違う部分の報告がある。だから、同じ子どもたちを通して繋いでいくということが出来ている。

○同じグループを見ても教員によって見方が違うということが大事な事です。これを子どもたちの授業の中

でもやらなくちゃいけない。ある問題が出たとき、正解だったらそれで終わりじゃなくて、もっと違う答えやそれに繋がる考えを引っ張り出してくることを通して子ども同士がいろんな意見を交流させていく。そういう授業づくりが次の課題として残っている。

○そのグループで繋ぐ、その人の中核の意見に対して自分はこう思っているんだということ繋ぐ。出来るだけ教員の中でも協議会の中で繋ぐということが意識できるようになるとさらに協議の質が変わってくると思います。

研究授業について

○グループはグループでやらせているんだけど全体に戻して、説明をさせるというところを後どう処理するかという問題が出てきますね。

○他の子に分かるように説明してあげて、と声をかけていた。これは分からない子に大事というより、分かったつもりでいる子にとって大事。わかったつもりでいるんだけどいざ説明をしようと思うと説明できない子が多い。人に説明することで知識を確認する。また、自分の学びを自分の言葉で言い直すということでもさらに定着させていく。それは非常に大事な事で、それが先生の言葉の中にたびたびある。

○それと、子どもたちの様子をよく見てますよね。例えば、机が離れていたらきっちりつけるような指導があったり、細かいことですが、そして、黒板に背を向けないように班を作ってね。と声をかけている。

学び合いと教え合い

○良く出来る子分からない子に対して教えるという関係が今ある。教え合う関係と学び合う関係は違います、ということをお話したと思いますが、今は教え合う関係は良くあるんですね。それは全部無くせという意味じゃなくて、これをもう少し形を変えて、分からない子がアプローチしていくという関係に子どもの関わり方を変えていく。つまり学び合いというのは分からない子が軸になるということです。分からない子の方にシフトされていてそこが中心になって働きかけをしていく。でも、まだそれが出来ていなくてやっぱり分かっている子が教えている。

○今日の中村先生は、とてもまくいってるなと思ったのは、わかったということは聞かなかったんですね。終わりの方で、各グループに問いかけるときに「まだ書けていない班ある？」と聞いている。まだ書けていない班があるということは、書けていない子たちを先生が意識しているということです。

○「書けた子。」とやると、書けた子は元気よく出るが、そういう影で書けてなかった子は、「自分たちは出来てなかったんだ。」ということだけ残ってしまう。「まだ書けていない人いるの？」と言ったときには、書けていない子は、「書けてません。」と言いやすいわけです。

○一人ひとりの分かってない子が浮き彫りにされてくるから、じゃあ、その子たちに対して「もういっぺんグループで聞いて。」と戻すことが出来る。

○課題というのは、教え合いになっているというのがあったんですが、それは「わからない。」が言えない子どもの関係性があるということです。

○分かっている子は言いたいという気持ちがどっかにあるんです。出来た子が教えたい気持ちを抑えて、発表したい気持ちを抑えて、分かってない子に「どう？」ということが聞けるかどうか。どこまで分かってどこから分からないということを聞くような関係性が作れるかどうか。自分が分かっているから教えてしまいたいところをぐっと抑えてその子の気持ちになってどこまで分かっているのって聞いてそこをきっちり具体的に教えることができるようにしていくことが大切。

関わりの4段階

○第1のレベルは、聞かれたら答えるという関係。第2のレベルは、隣の人は何を困っているかその気持ちを察知できる関係。そういう配慮が出来る子が教室の中に何人かいる。中1ならば、もう一つ上げて第3段階は、聞けるということですね。例えば、隣の子が分からないでボウツとしているな、ということが分かたらその時にアクションを起こす。「どこか困ったことあるの？」と言ってくれると、困っている子は言いやすくなる。す

ると二人の関係の中で「教えて。」と言えるという関係が出来る。

○相手の意向も聞かなくて、一方的に教えてしまうとそれは相手に対して屈辱的な思いをさせたり、あくまでも上から目線で「教えてやるわ。」と、上下関係を作っていくって、教えられる子はすごいイヤな気持ちになる。というところを避けたい。対等な関係で学び合え、そうすると分からない子は先に声をかける。

○グループになったときに先生方はまず、「わかったことを言い合うというよりもむしろ、まず最初に口火を切るのは出来た子が切るんじゃないよ。分からない子が必ず聞くんだよ。それが第一声だよ。グループの中で」というルール作りをしてほしい。そこを次の課題として切り替えていく。分かった子は言いたいんだけど、そこをぐっと抑えて分からない子に譲っていく。まず、分からないこの言葉を聞いてというグループのルールが出来てくると分からない子はだんだん言えるような関係になってくる。そういうことも同士の関係性を作っていくたいな、と思います。

学びを個に戻す

○今日の授業で面白いのはグループでやった後、もう一度自分で確認させようとした。これによって、これやらなくちゃいけない、とそれまで人任せにしていた子も自分でやらなくてはならなくなる。そこで、はじめて書ける書けないがはっきりしてくる。つまり、学びが個に戻っていく、個人で作業させることによってちゃんと学んだかどうかが出てくる。

○グループで一つのプリントで学習するとき何が起きているのか、ということですね。やっぱり人任せにしている人が何人かいるんです。だから結局分かった子が説明する、という関係性がそこの中にある。だから、学びが個人のものであるというのであれば、個々にやらした方がいいのではないかな。そうすればもっと時間が短縮できる、その場で分からないことで聞き合いが出来る。でも、今日のやり方がいけないとは思わなければ時間的に後保障できなくなった。

学び直しという考え方

○導入の部分をもっとスパッと切っても良い。つまり、この課題1 課題2 は同じような作図の能力を使うわけです。角の2等分線と垂直2等分線を使っていくので、課題2をやる中でもういっぺん学び直しをするわけです。角の2等分線と垂直2等分線をもういっぺん使わなければいけないから、分からなかったら聞かざるを得ない。そこでもういっぺん学び直しをするので、前半の課題1を100%分からなくても次の課題でもう一度学び直しをしたら考えたときに、うまく課題の流れが出来ておればそれでもかまわないかなと思います。その方が学べる子たちが多くなる。

分かった子は何を学ぶのか

○今日はTくんが学んだ学ばないよりもHくんが学びをするんじゃないか、ということです。自分の分かったことを人に伝える困難さを感じたのではないかなと思います。Hくんは途中で「まあ、あきれた」という表情でね、ポウツとしていた。そこへ入ってきたのがTさん。Tさんが優しくお姉さんのように、あとお母さんみたいに優しく言って「これはこういうことで・・・。」と対応した。お父さんに叱られた子をもういっぺん諭す、そういう関係ね。

○本当に分からないことを言えない、どこが分かってどこが分からないか伝えきれないので、教える方も「まだわからないのか、まだわからないのか」とやるから、だんだん肩身の狭い思いをしていく。あまりこれをやると不登校になる可能性があります。そういう関係を作ってはいけない、ということがあります。

○学び合いは出来ない子から聞くということを小グループの中で徹底をしていかなければいけない。子どもたちは教師のそういう応援によって「わからない。」が、言えるようになっていく。それを教師が見殺しにするようなことをしてはいけない。その点を考えて欲しいなと思います。

○ただ、Hくんはいかに自分が分かって人に伝えることが難しいか感じたと思います。でも別の問題を作ってね、「これやってごらん」とか言って、大きなお節介のような気がしたんだけど、でも親心みたいな感じでやってたんですごく面白かったんですけど。そこに、新しいHくんの課題が出てきたんじゃないかなと思います。